

第1章 なぜ今アウトプット重視なのか

1. 学校英語教育の今日的課題

■ 日本の子どもたちの学力低下

徐々に世界ランキングの順位が下がる日本の子どもたちの国際学習到達度調査 (PISA) の結果を受けて危機感を覚える

→しかし、あくまでも上位にランクインしており、PISA への過剰反応は生産的ではない

■ 英語学習者の英語力の低迷下

2005-06 年度 TOEFL (iBT) の結果、日本はアジア 28 か国・地域のうち最下位

2002-03 年度 TOEIC (受験者が 500 名以上の国を比較) の結果、29 か国・地域中 26 位)

■ 各国との比較

- ・韓国 : 以前は日本よりも低迷していたが、TOEFL では日本の 6 倍の受験者にも関わらず、日本の順位を上回っている

⇒一般学力では上位でも、英語力ではかなり下位にある

- ・フィンランド : PISA では世界一位。2005-06 年度 TOEFL (iBT) の結果、8 位。しかし、母語であるフィンランド語は、日本語のように英語とはかけ離れた言語。

- ・シンガポール : 第 3 回数学・理科教育調査で世界 1 位。TOEFL で世界 3 位。

⇒国際貿易に依存しなければならない点では日本はフィンランドやシンガポールと同じ状況にある。英語を通じての国際化が急速に進む現在、一般学力に見合う英語力が必要。

2. 英語力改善の切り札としてのアウトプット重視

■ 英語力改善のために

一般学力に見合う英語力のためにはアウトプットを増やすことが必要。

■ なぜこれまでの日本の英語教育は受け身的だったのか

◇ 理由 1 : 受容技能中心の入学試験

受験生の多さと公平さの観点から、長年発表技能を要求する試験は避けられてきた。

◇ 理由 2 : 英語授業のクラスサイズ

一人の教師に対する現在のクラス人数では、英作文の添削やスピーキングの訓練は困難。

◇ 理由 3 : 英語学習の基本は英文を正しく文法的に理解することであるという教師の間の根深い信仰

日常発信する場がないからこそ、教室でのアウトプットの機会が必要。「使うための学習」から「使いながらの学習」へ。

◇ 理由 4 : コミュニケーション活動の普及

ゲーム性やタスク性を重視するあまり、アウトプットへの量的な配慮が不足しがちに。

3. 日本人英語学習者にとってのアウトプットの意義

■ 第2習得におけるアウトプットの意義を唱えた M.Swain

Swain,1974 : イマージョン教育履修者のフランス語能力の研究の中で、彼らの受容能力はフランス語母語話者に匹敵するが、運用能力においては改善の余地がかなり残されていること、その理由がイマージョン授業の中でもフランス語を使う機会が限定されていることや運用の機会が与えられても単語や句に限定される傾向があることに気づく。

↓

「理解可能なインプット」(comprehensible input)(S. Krashen)だけでは目標言語の正確な運用能力は獲得できない。「インプット仮説」(Input hypothesis)

↓

「アウトプット仮説」(Output hypothesis)の提案。

生徒がペアでフランス語の表現についてフランス語で話し合う活動(collaborative dialogue)の提案。(Swain,2000)

「理解可能なアウトプット」(Comprehensive output)の役割

- ①学習者による気づき(noticing)を促す
- ②学習者による仮説検証(hypothesis testing)の機会を与える
- ③学習者による意識的な振り返り(conscious reflection)を促し、メタ認知の成長を促す

■ 日本の英語教育への応用の際の注意点

「アウトプット仮説」はイマージョン教育で生まれたことを忘れてはならない。学習ではなく、習得が基本となるような学習環境である必要があり、意識的な文法学習が行われている日本の現場には必ずしも当てはまらない。日本独自の位置づけが必要。

- アウトプットはインプットで獲得された「宣言的知識(declarative knowledge)」から実用できる「手続き的知識(procedural knowledge)」へ。
個々の学習者のレベルで「使うために学ぶ」から「使いながら学ぶ」への転換の必要性。
- 情意面の観点から
英語でのアウトプットは、日本人がもつ英語を話すことに対する劣等感を軽減する。「情意フィルタ」(affective filter)(Krashen,1982)を下げることに役立つ。

[授業後]

*なぜフィンランドの教育は PISA での高得点に繋がるのか。

- ・ 将来のために努力してきたが基礎学力が不足している生徒のために、9 年間の義務教育の後にもう一年履修できる期間があり、彼らを「落第」と見るのではなく、「他の人よりも 1 年長くがんばった」とみる。

⇒**基礎学力の重視。「できない」ことを否定しないで受け止める。**

- ・ 教師は希望者の十分の一しか就業できない職。大学卒業後、教員養成期間が最低 5 年間あり、高度な教育を受けた者のみになれる。また、多くの教育は教師の自由に一任される。

⇒**教師の責任の重さ。自由度。**

- ・ 北欧の地域性、母国語を愛する土壌、政策において教育と文化と福祉に対する手厚い保護、図書サービスが充実

⇒**自由な学び。高い読書量**

以上のような要因が大きく、フィンランドの教育は世界中から視察者が来るほど高く評価されている。

[ベネッセホームページ]

* 「宣言的知識(declarative knowledge)」

それが何であるかという知識。宣言的文章(A は B である)や、命題的文章(A ならば B である)で表される。

「手続き的知識(procedural knowledge)」

それをどう行うかという知識。ノウハウ。

[ウィキペディアフリー百科事典]

*感想

アウトプットが必要であることは、近年、大体の教師や学習者に理解されてきた事実であ

と思う。ただ、問題点に挙げられていたように、今の教育現場ではやりにくいものであることに変わりはないだろう。根本的に日本の英語教育を変えていくべきか、今の環境の中でうまくアウトプットを行っていくべきか難しいところだと思う。

ひとつ興味深かったのは、「コミュニケーション力を重視するあまり、アウトプットの量が減った」という点である。英語でコミュニケーションをとることは、要は得た知識をアウトプットすることであるにも関わらず、そうした指摘がでるのも不思議である。私は、「コミュニケーションを重視したため」ではなく、教師の行うコミュニケーション力育成の指導法や、上記にも述べた、教育環境の限界が大きな原因ではないかと感じた。